

郷土史への扉

今年、霧島神宮が正徳五（一七一五）年に現在の地に造営されてから三〇〇年を迎えます。これまでは霧島神宮の由来や造営の経緯、社殿の構造（配置）について紹介してきましたが、今回は霧島神宮の社殿（本殿）の装飾・彩色・彫刻について紹介します。

色彩を施した理由

霧島神宮の社殿は、正面の勅使殿から登廊下、拝殿、幣殿、そして本殿へと直線状に配しています。また、登廊下の途中から西側に延びた廊下の先に神饌所があり、社殿全体は赤（朱）を基調に彩色を五色豊かに施しています。その理由としては次のようなことが考えられます。

- ①華やかな趣きを醸し出している。
- ②古来、朱色は紫に次ぐ官位色で、一般人が使用できない色であった。
- ③朱色は魔除けや厄除けの色であった。
- ④当地域は神社名からでも分かるように霧が多く発生するところであり、湿気や結露が木造の建物にとっては悪い環境であることから、漆や顔料などで部材の保護や劣化を防いでい

る。
私たちは普段、神社を訪れ、社殿を何気なく見えています。そのイメージは彩色のある神社を思い浮かべる人も多いかもしれませんが、伊勢神宮や人吉市の青井阿蘇神社、霧島市内では和気神社など彩色のない神社も多くあります。

また、前述しました「霧島六社権現」では、霧島神宮と霧島東神社には彩色があります。狭野神社、霧島岑神社、東霧島神社は彩色していません。その

造営二百年 霧島神宮 その③

理由は明らかではありませんが、非常に興味深いことです。

本殿龍柱とその影響

霧島神宮の社殿装飾の最大の特徴は、本殿正面にあります。向拝を支えている二本の柱（向拝柱）に巻き付くように彫られた龍柱の存在です。この龍柱は一本の木を丸彫りしており、阿吽の龍が向き合うように配しています。彫り物の大きさや構図、豊かな色彩が一体となった迫力は、神宮本殿を荘厳な趣

きにしています。
また、このような龍柱を持つ神社は、関東地方を含む東日本に一部見ることができ、それらの社殿の造営はいずれも江戸時代中期のものです。

一方、九州地方では霧島神宮周辺の霧島東神社（一八四八年）、東霧島神社（一八四九年）、鹿児島神宮（一七五六年）、蒲生八幡神社（一七八四年）、やや離れた宮崎県高千穂の黒石神社（一七九三年）に見られるだけです。しかも、これらの社殿の造営年代

は霧島神宮より新しくなっていることから、霧島神宮本殿の龍柱様式が周辺の神社建築に深く影響を与えたことが分かります。

独自の造形彫刻

神宮本殿の彫刻の中で、もう一つ注目される彫刻があります。それは、龍柱の上部にある通称「手挟」と呼ばれる部材です。霧島神宮では「立花図（牡丹の花）」をモチーフとした具象的な立体彫刻を施しており、極めて独自の



本殿向拝 龍柱



本殿向拝 立花図彫刻 (牡丹)

で、このような事例はほかの建築物には見られない非常に貴重な彫刻となっています。

このように、霧島神宮はほかの神社には見られない彫刻や前回紹介しました「二十四孝」の壁画など江戸時代中期の装飾様式、龍柱を象徴するような南方系（琉球・中国）の影響を受けた造りとなっており、霧島神宮は極めて貴重な^{*}社殿と言えるでしょう。

（文責 鈴木）

※平成元年五月に国指定重要文化財（建造物）となった。